



「VOICE 農業の現場から」は、京都府福知山市三和町で農業を営む、農業生産法人(株)京都府天田郡みわ・ダツシュ村が、日本の食の安全と農業の発展を願い、農業の現場・農政の矛盾・国民への投げかけを、メディアの皆様が発信するものです。食料自給率が低迷する中、農業改革は日本にとって必至です。メディアの皆様には様々な角度から農業を見ていただきたいとの思いから、情報提供をさせていただきます。

VOL.12 限界集落の活性化

今回のVOICEでは、みわ・ダツシュ村の限界集落活性化活動を例に、日本の限界集落が抱える問題点とその解決策を考える。

●限界集落の実情

当社が運営する農場「みわ・ダツシュ村」のある京都府福知山市「三和町」は、限界集落(※)をいくつも抱える過疎の町である。当社は、この三和町で耕作放棄地を開墾し農業を行うことで地域を活性化する事業を行っている。

(※)限界集落：人口の50%以上が65歳以上の高齢者である集落。

2009年、自給自足生活を望む山本一家(夫婦・男児3名)が京都市内から、三和町の限界集落「稲葉」に移住してきた。稲葉には約10戸の世帯がある。そのうちの1名に昨年「もし、山本一家が来ていなかったら、稲葉は10年後どうなっているか?」と聞いたところ「だあれも居らんようになる」との返答であった。このような集落はやがて消滅する。集落が消滅すれば山林や田畑に手を入れる人が居なくなり荒れ果ていき、治山治水面でマイナスの影響が生じる。

このような現象は、日本各地で起きている。

●限界集落活性化の一案

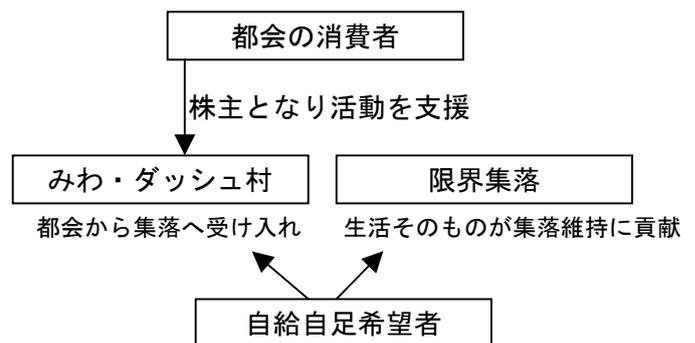
「地域の活性化」は「人・モノ・金」を循環させることで促される。ただし、その地域が「限界集落」の場合、キーポイントとなるのは「若い人」である。なぜなら限界集落は「活性化」の前に「維持」をする必要がありそのためには、その集落を引き継げる「若い人」が必要不可欠であるからだ。

まず維持できる条件を整え、その上で活性化を考えなくてはいけない。

当社は、三和町の限界集落を一つでも二つでも維持・活性化するために、当社が募集する移住スタッフ(都会から三和町に移住し当社のスタッフとして農業担当をするスタッフ)は「若い子供を持つ家庭」を条件としている。

そして、そのような当社の事業は、社会貢献活動に賛同する都会の消費者によって支えられている。彼ら「一口農場主」は、「株主」となることで当社の活動に参加している。

つまり、下記のような関係になる。



これは、農業生産法人 株式会社京都府天田郡みわ・ダツシュ村という、民間企業の活動の一例であるが、限界集落の維持・活性化や中山間地の保全是、その地域だけの課題ではなく、日本全体の課題としてとらえ、都会の消費者も参加できるような活性化・保全活動を考案する必要があるのではないだろうか。

耕作放棄農地問題に取り組む、みわ・ダツシュ村

当社は、限界集落を有する過疎地の三和町に点在する耕作放棄農地を購入して開墾し、優良化した農地で完全無農薬有機で農業をしております。農業の現場にいる者として、現場だからこそ見える、農政の矛盾・農業従事者からの提案を発信し、日本の農業の振興につなげていきたいと考えております。

■お問合せ先：農業生産法人・株式会社京都府天田郡みわ・ダツシュ村(略称・みわ・ダツシュ村)
代表取締役村長清水三雄(しみずみつお)

■住所(京都四条オフィス)：〒600-8412京都市下京区烏丸綾小路下がる西側 四条地下鉄ビル6F

■TEL：075-954-6666(代表取締役村長 清水三雄直通)

みわ・ダツシュ村

検索